

2020年2月9日

KIBC 聖日礼拝

奨励 駒井 洋子

主題：「共に集まる幸いと喜び」

—互いに仕え、愛し合う—

テキスト：ヨハネ13章1節

「さて、過越しの祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」(2017年)

### はじめに

先月の初めに今日の奨励のお話を頂いたとき、少し重荷に感じました。しかし「奨励」という言葉は、「勇気づける」あるいは「元気づける」という意味もあります。私は今すごく元気で、喜んでいきます。ですから、この喜びを皆様にお伝えするのは嬉しいことだと思い、主の助けを祈り求め、ここに立たせていただくことになりました。

私がKIBCの礼拝に参加し始めたのは2007年12月からでした。それまでの私の信仰生活は、頑張って頑張って、自分の罪を責めて、傷ついて、それでも教会には毎週行っていました。でも教会は、心休まるどころではありませんでした。それを主が哀れんでくださったのでしょ、この北浜の教会に導いてくださいました。

それから、数年して、ある土曜の夜、日曜日の自分のお弁当を準備している時、娘が「お母さん、教会楽しそうね。良かったね。」と言いました。その頃からは本当に教会生活が楽しくなってきました。娘にもそれが感じられるほど、私は楽しそうにしていたのでしょ。今回、なぜ私はこれほど教会生活が楽しいのだろうと振り返り、少し考えて整理をして今日の奨励と関係付けてお話しさせていただきたいと思ひます。

### 奨励のポイント

1. イエス・キリストが最後に弟子たちに示されたこと

私がヨハネの福音書を読んでいた時、下記の1節（下線）が大変心に残りました。

### ヨハネ13章1節

さて、過越しの祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。（2017年）

さて、過越しの祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分の者を愛されたイエスは、その愛(アガペー)を残るところなく示された。

過ぎ越しの祭りの前、イエスは弟子たちと最後の食事をされました。（最後の晩餐）イエスはいよいよご自分が十字架につけられ、この世を去るときが来たことをご存知でした。ご自分が十字架につけられ、死んだあと、弟子たちをこの世に残していかなければなりません。その弟子たちは、3年もイエスと共に歩み、最後まで着いてきた者たちでしたが、しかし彼らがどんなに弱く、頼りないものかもよくご存知でした。

ヨハネ13章1節から17章まで、イエスが、どれほど彼らのことを愛されていたか、その思いが書かれています。そして、この5章の間、ずっとイエスが弟子に語られ、教え、励ましを与え、また希望の約束も与えられます。それから、ゲッセマネの園で祈られ、逮捕されます。それまでの残された10時間余りの時間を、弟子たちとだけ交わりをし、食事をし、過ごされました。私には、これらイエスの言葉は、弟子に対する遺言のような気がしました。

私は、もう30年以上前になりますが、クリスチャンの姉妹を病気で亡くしました。彼女はまだ、30歳中頃で、小学生の二人の子供がいました。病院にお見舞いに行くと、「あの子たちはこれからどんな風に生きていくのかしら」とつぶやいていました。まだ、信仰を持って浅かった私は、それに対して、何にも答えることができませんでした。

イエスが処刑される前に弟子に語られたことは、大変重要な内容が込められていて、それは、今の私たちにも同様に重要な語りかけとなります。

#### 1) イエスの模範—互いに仕え合う

13章でイエスが最初にされたことは、弟子たちの足を洗うことでした。

13：4 イエスは夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

13：5 それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいで拭き始められた。

私たちは、「確かに当時は道路もほこりだらけで、サンダルのようなものを履いていたから、足もほこりだらけで、洗わないとねえ。」と簡単に思います。当時、足を洗う役目は奴隷（しもべ）の役目でした。ですから、弟子が主と仰ぐイエスの足を洗うということは、もしかしたら、あったかもしれませんが、弟子同士、同等の者が互いに足を洗い合うということは、当時そんなことは考えられないことだったようです。しかし、主であるイエスがこの奴隷の仕事をなさいました。

ところが、イエスがペテロの足を洗おうとなさったとき、

13：8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足を洗わないでください。」イエスは答えられた。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります。」

13：9 シモン・ペテロは言った。「主よ、足だけでなく手も頭も洗ってください。」

13：10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」

ペテロはこのイエスの驚くべき行為の背後にある霊的清めの意味をとらえることができませんでした。簡単にいいますと、ここで言う「水浴する」とはイエスを信じて救われることで、「足をあらう」とは、日々主の前に出て罪の悔い改めによって清めていただくということです。私たちも、一日の罪のほこりを、主の前に持ってゆき、洗っていただく必要があります。その時は、どれほど私たちが、主に赦されているか、愛されているのかを実感する時

でもあります。

「皆がきよいわけではありません。」とイエスが指摘したユダは、このあと、イエスを売るために外へ出て行きます。ユダがイエスを祭司長・長老に売った金額は、銀貨30枚。当時の奴隷の値段は銀貨30枚、これと同様です。祭司長や長老は、イエスの価値は奴隷並だと、値段をつけたのでした。イエスは、ユダに奴隷の値段で売られる前に、すでに奴隷（しもべ）となって、弟子たちの足を洗われていました。

13：12 イエスは彼らの足を洗うと、上着を着て再び席に着き、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたかわかりますか。

13：14 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。」

13：15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです」

イエスの「主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。」このおことばを聞いた弟子たちは、どんなに驚いたことでしょうか。

それどころか、そのとき弟子たちは、こんな論争をしていたと聖書に書かれています。

ルカ

9：46 また、かれらの間で、自分たちのうちでだれが一番偉いのだろうか、という議論も起こった。

しかし、イエス・キリストは

ピリピ人への手紙

2：6 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考

えず、

2 : 7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、

2 : 8 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。

イエス・キリストは、このあと捕らえられ、裁判にかけられ、<sup>ざいにん</sup>罪人として十字架にかけられます。

ピリピ

2 : 3 何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。

イエスは、弟子の足を洗うことによって、自分を低くすることを、言葉だけでなく実際目に見えるような形で模範を示されました。それは、弟子たちも互いに足を洗い合う、つまり、互いにへりくだり、仕え合いなさいと教えられました。なんと弟子たちとイエス・キリストとの間には大きな隔たりがあるのでしょうか。これが弟子たちであり、これが私たちです。

2) イエス・キリストの新しい戒め—互いに愛し合いなさい。

弟子の足を洗うという驚くべき模範を示されたイエスは、それから、次のように語られました。

ヨハネ

13 : 34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。私があなた方を愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

13 : 35 互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子である

ことを、すべての人が認めるようになります。

愛の戒めは、旧約聖書にも記されていて、新しいものではありません。

### 申命記

6 : 5 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

### レビ記

19 : 18 b あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは主である。

イエスご自身も、旧約聖書を引用されました。

### マタイ

22 : 34 パリサイ人たちはイエスがサドカイ人を黙らせたと聞いて、一緒に集まった。

22 : 35 そして彼らのうちの一人、律法の専門化がイエスを試そうとして尋ねた。

22 : 36 「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか」

22 : 37 イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神主を愛しなさい。』

22 : 38 これが重要な第一の戒めです。

22 : 39 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』という第二の戒めも、それと同じように重要です。

22 : 40 この二つの戒めに律法と預言書の全体がかかっているのです。」

ですから、イエスは律法を否定されたものではありません、しかし、ここでは、イエスは「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。」と言われました。いったい、どこが新しいのでしょうか？イエスの新しい戒めは、どのような新しい基準によるのでしょうか？

それは、イエスの犠牲的な愛(as I love you,)にならうというものです。

ヨハネ

15 : 12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

イエスの模範にならって、「わたしがあなたがたを愛したように」互いに愛し合うことです。イエスの謙遜（しもべ）にならって互いに愛し合うことです。

イエスの新しい戒め、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと」は、神の子イエスが身を低くして弟子たちに仕え、愛されたことを模範として愛するものです。たしかに、イエスは人を愛して、十字架にかかって死ぬために来られたのです。すべて、イエスにならうことから始まります。

では、なぜイエスは弟子たちにこのような新しい愛の戒めを与えられたのでしょうか。

13 : 34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。私  
あなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

13 : 35 互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子である  
ことを、すべての人が認めるようになります。

それは、彼らが、互いに愛し合うことによって、イエスの弟子であることを証しするためです。私たちイエスにならうものは、互いの間にある愛によってイエスを証しするものと変えられていきます。

### 3. 教会—新しいクリスチャン共同体

## 1) イエスの祈り

「互いに仕え合いなさい」「互いに愛し合いなさい」と教えられたイエスは、過ぎ越しの祭りの前の食事の最後に、父なる神に祈られました。まず、ご自身のため、そして次に、目の前の弟子たちのために祈られました。

### ヨハネ

- 17 : 14 わたしは彼らにあなたのみことばを伝えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものではないように、彼らもこの世のものではないからです。
- 17 : 15 彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪いものから守ってくださるようお願いします。

弟子たちを憎むこの世から取り去って天に迎えてくださいと祈るのではなく、この世で彼らを守ってくださいと祈られました。それは、弟子たちがこの世でイエスを証しするためです。

そして、最後に、イエスのことばを信じたクリスチャン、すなわち私たちのために父なる神に祈られました。それは、私たちが主にあって一つになるようという祈りでした。

- 17 : 20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。
- 17 : 21 父よ、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。あなたが私を遣わされたことを、世が信じるようになるためです。
- 17 : 22 またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一



つであるように、彼らも一つになるためです。

17:23 わたしは彼らのうちにおいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。

イエスが父なる神と一つであるように、私たちが主にあって一つになることを祈られました。それによって、父なる神がイエスをこの世に使わされたこと、そして、イエスを愛されたように私たちをも愛されたことを、世が知るようになるためです。

## 2) キリストのからだである私の教会—キリストのゆえに一つになる

パウロは、1コリント人への手紙12章で教会を「キリストを頭とした一つのからだ」に例えています。パウロは、身体の各部分、例えば手が足に、耳が目に勝手なことをいえばどうなるでしょうと、面白い例を挙げて語っています。どうぞ、あとでゆっくりお読みください。教会は、キリストに愛され、キリストを愛する色々な人たちが、ただ、頭なるキリストのゆえに一つなるところで、また一つになれるところです。

### 1コリント

12:25 それは、からだの中に分裂が無く、各部分が互いのために、同じように配慮し合うためです。

12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。

12:27 あなたがたは、キリストのからだであって、一人ひとりはその部分です。

キリストにある私たちは、

キリストの「新しい愛の戒め」—キリストにあって互いに仕え合い、互いに愛し合う

キリストにあって「一つである」—キリストのからだの一部分である。一人ひとりが、キリストの身体に属し、一つとなる。

このことによって、教会がキリストを具体的に現し、証しする場となることが求められています。

### 結びと奨励

最後に、なぜ私が教会で「楽しく、喜んでいる」のかということが、今日の奨励をまとめている間にその理由が分かったような気がしました。

先ず第一に、週のはじめに神を礼拝する特権が与えられ、教会に導かれていること。礼拝・賛美・メッセージを通して、自分が悔い改め・教えられ・新しく歩むために整えられ、力が与えられ、自由にされる。新しい一週間を、新たに与えられた力で始めることができる。

第二に、教会の家族との交わりを楽しむことが出来る。それは、今日取り上げました主にあって「互いに仕え合い」「互いに愛し合う」ことによってです。良い交わり、良い会話、的確な心配、それに対する的確な心遣い。ちょっとした話の中に大きな慰めや、いたわり、励ましを貰い、喜びを味わい、感謝に満たされて新しい一週間を始めることができます。最近、教会の中で「キリストの家族だものね。」という言葉が耳にしますが、教会は温かいところなのです。

私は思うのですが、主の教会は、自由で、自分を飾る必要の無い安心できる場所であると思います。少しずついろいろな人と知り合いになり、特に奉仕を通して、今まで知らなかった主にある兄弟姉妹のつながりが深くなり、教会が自分の居場所となります。私自身も、そのように、仕えていただいたり、声をかけていただいたり、教えられたり、愛される経験をするたびに、「ああ、主よ、感謝です。嬉しいなあ」「なんて祝されているのだろうか」と思っています。そんな私をみて「お母さん、教会楽しそうだね。よかったね」と娘が言ったのだと思います。

最後に、初代教会の使徒たちの経験をもっともっと私達も味わいたく、日々主に期待して

お祈りしていきたいと思います。現在社会の忙しい中、毎日集まることは出来ませんが、初代教会の「ともに集まる祝福を」私たちもを味わっていききたいものです。

## 使徒

2 : 4 6 そして、毎日、心一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心を持って食事をともにし、

2 : 4 7 神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださった。

私たちの教会が、周りの方に、また、初めて来られた方に好意を持たれるように、救われる人々を加えてくださるように、なおも主に願い、祈っていききたいと思います。

感謝します。